

たのしい たのしい 船穂校♪

倉敷市立船穂小学校 横山文朗

草刈り

土曜日にたから保育園の運動会がありました。船穂小学校の児童が大勢観に行っていて、「校長先生！」と声をかけてくれともうれしかったです。たから保育園は二万小学校の近くにあることもあって、二万小学校区の子どもが多く通っています。その中に私が26年前に担任した子の子どもが三人います。二人は知っていたのですが、H君は、「横山先生、お久しぶりです。Hです。」と声をかけてくれてわかりました。教え子の子が運動会で走っている様子を観るのは感慨深いものがあります。過ぎ去った時間の長さ、今も昔と変わらず担任として慕ってくれる教え子の有り難さを思いました。

採用後10年が過ぎ、突然校長先生から告げられた学校は、同じ町の一番小さな、そして家から一番遠い学校でした。次は総社市か倉敷市の学校にかわりたいと思っていましたので、悲しさとくやしさが心がいっぱいになり、ずいぶんつらい気持ちで二万小学校の勤務が始まりました。

二年目、教頭先生と教務主任の先生がかわりました。周囲が山の自然あふれる学校でしたが、草刈りをしないので、日を追うごとに学校の周りは草が生い茂るようになりました。見かねたわたしは、放課後に草を刈るようになりました。5校時に自習をさせて山のように集めた草を焼きました。同級生が、倉敷市の大きな学校にかわった、附属小学校に勤めているという中で、自分の仕事は校地の草刈りかと、あまりに情けない自分に涙があふれ、高台から校舎を眺めながら泣きました。

そんな思いで働いていたときに、人権教育の講演会がありました。講師の先生は、敗戦直後に倉敷市の万寿小学校に赴任されたそうです。団塊の世代が小学生の頃で、児童数にくらべて便所の数が足りず、低学年の児童のおもらしが頻発しました。案じた先生は、校庭の隅に大きな穴を掘りました。便所を上級生に取られた低学年の児童が、男児も女児もやってきておしっこをしました。そして、おもらしの数は激減しました。ところが、その日から子どもたちがしたおしっこを裏の学校園まで運ぶことが先生の日課になりました。周囲の先生方の目は冷ややかで誰も手伝ってはくれません。「しかし、転勤するまで、わたしはおしっこを運び続けました。誰にたのまれたわけではないのに、わしがせんでもええのにと思いながらも、子どもたちのために汗を流しました。」と話を結ばれました。

自分が置かれた立場と先生の言葉が重なり、歯をくいしばっている自分に対するエールに思え、心が熱くなりほほを涙が伝いました。

最初の涙は、自己愛だけのつまらない涙であり、二度目の涙は、わたしがようやく一人前の教員の入り口にたどり着いたしるしの涙でした。二万小学校には、9年間勤務しました。振り返ると、わたしが一番輝いていた学校のように思えます。

